

◆【海員随想】はるかなる南氷洋③ 谷頭正仁

— 日新丸、第2日新丸、第3日新丸 —

昭和38年当時は、天測以外に南氷洋で位置を知る方法はありません。義務ではありませんでしたが、一部天測を行いました。

南氷洋特有のガス、これが天測を難しいものにする理由であり、鯨を長生きさせた理由かもしれません。

第18次南氷洋捕鯨はケルゲレン島、ハード島あたりが主な漁場だったかと思いますが、あのケルゲレンにドイツはトナカイを持ち込み、気象観測所を置いていたようですね。何回か、遠くからその島影を見ましたが、水墨画を見るようでした。

18次南鯨はいわゆるオリンピック方式で、早い者勝ち、捕鯨委員会が「何月何日何時終了」と発表する方法です。冷凍船の甲板は常に鯨肉でいっぱいでした。

ザトウ鯨が禁鯨になり、シロナガス鯨が禁鯨になり、捕獲も割当制になりました。

最初に5カ月ほど乗っていたタンカー航海中の第2日新丸ではいろいろな人的事故について、話を聞かされました。当然の事ながら、南氷洋捕鯨出漁は乗組員に相当の高給をもたらしました。自分は本給1万7500円、持率310であったかと思いますが。何もできない三航士はこれもねたまれました。本給1万7500円は甲板部員なら、30歳以上の操舵手でしょうし、持率310は40歳の甲板庫手だったのではないのでしょうか。三航士、甲種船長筆記合格というのがどういうことかよく分かりません。当時、航海士にとっては甲長筆記を持っているというのは大きな誇りだったのでしょう。

「海員だより」